

長田英策三代計

初編
合、五



吉田三代記合卷ノ八

一 信玄嫡子義隆下布和義 貞田昌幸忠之と交

一 義隆通之今川家合戦 義隆義隆の^{カミ}人石柳と交

一 信玄嫡子義隆切腹 吉田信隆義隆と交

一 信玄嫡子義隆^{トモ}の^{トモ}政^{トモ}と交 吉田信隆義隆と交

一 吉田信隆義隆と交 吉田信隆義隆と交

一 今川家と交 義隆義隆と交 甲府と交

一 武田信玄義隆と交 吉田昌幸介と交

一 昌幸と交 今川家と交 吉田昌幸介と交

一 徳川家と交 徳川家と交 吉田昌幸介と交

一徳川表駿河掛川の所攻に及山篠平左衛門昌幸曾戦に及

一昌幸智将小糸智将修之亮 荒川多目討死に及

一秀吉を討て信玄少歟く及 昌幸由下る謀幸うおくる

信玄略多及信ト不和及 其昌幸右とてし

取し其昌幸房ちい父幸隆の遺戒をちう駿河に及く信玄に

及得し其昌幸房ちい父信隆房の所ゆり岩屋に其家来然し其

ちう其に信玄の嫡子とて而て其信の謀に及ふ其家来下其

其家来とてし其家来信に其月其威其其い其家来とてし

信い其家来とてし其昌幸其月其家来とてし其家来其甲

其家来其甲其家来其甲其家来其甲其家来其甲其家来其甲

其家来其甲其家来其甲其家来其甲其家来其甲其家来其甲

其家来其甲其家来其甲其家来其甲其家来其甲其家来其甲

其家来其甲其家来其甲其家来其甲其家来其甲其家来其甲

其家来其甲其家来其甲其家来其甲其家来其甲其家来其甲

其家来其甲其家来其甲其家来其甲其家来其甲其家来其甲

其家来其甲其家来其甲其家来其甲其家来其甲其家来其甲

其家来其甲其家来其甲其家来其甲其家来其甲其家来其甲

其家来其甲其家来其甲其家来其甲其家来其甲其家来其甲

其家来其甲其家来其甲其家来其甲其家来其甲其家来其甲

其家来其甲其家来其甲其家来其甲其家来其甲其家来其甲

其家来其甲其家来其甲其家来其甲其家来其甲其家来其甲

其家来其甲其家来其甲其家来其甲其家来其甲其家来其甲

其家来其甲其家来其甲其家来其甲其家来其甲其家来其甲

其家来其甲其家来其甲其家来其甲其家来其甲其家来其甲

云々や流るる若尾へ使してまゐる一味の如いなり是に
るる懐いなり一居たまふなりPくるる根用居ち是の
より後と云れりなりなり使えりまゐる連大各刑部なり連
赤たまりをるるるるを若尾へまゐりしるる根又馬口昌幸の
取次しるる武田よりなり使徒見ゆるなり使徒を執る昌輝
ありて對面しけり使徒をまゐり使徒を入し平氏をPくるる金
へゆりるるるるなり大各刑部なり各使たりて来り對
面しPくるる根し武田より殿父を中より執りて二男持
頼しなり使徒の改めんなり因り執るなり又使徒を執る
くしして客をんりけりなり使徒を在使徒を根亦見え

使徒より側よりなり使徒より居しなり又使徒を押して使徒を
使徒の金なり是に使徒を昌幸にも使徒を執るなり一味の
るるるしるる使徒を執るなり使徒の口よりいひ大色に
しおる使徒使徒の執るなり使徒の口よりいひ使徒の口より
使徒をPくるる使徒の口よりいひ使徒の口よりいひ大各
ゆし使徒使徒昌輝にPくるる使徒の口よりいひ使徒の口より
して使徒の口よりいひ使徒の口よりいひ使徒の口よりいひ
を執るなり使徒の口よりいひ使徒の口よりいひ使徒の口より
しるる使徒の口よりいひ使徒の口よりいひ使徒の口よりいひ
けりPくるるなり使徒の口よりいひ使徒の口よりいひ使徒の口よりいひ

もとより一紀法より信じて一々其信をりて一頃より信じて
既にお大なる必死の運候長き候も及ばず酒毒の候しあひて其信を
信じていかに川原の邊よりあつたはるを信じて一又信をりて其信を
信じて一又信をりて其信をりて其信をりて其信をりて其信をりて
既にお大なる必死の運候長き候も及ばず酒毒の候しあひて其信を
信じていかに川原の邊よりあつたはるを信じて一又信をりて其信を
信じて一又信をりて其信をりて其信をりて其信をりて其信をりて
必死の運候長き候も及ばず酒毒の候しあひて其信を
信じていかに川原の邊よりあつたはるを信じて一又信をりて其信を
信じて一又信をりて其信をりて其信をりて其信をりて其信をりて
既にお大なる必死の運候長き候も及ばず酒毒の候しあひて其信を
信じていかに川原の邊よりあつたはるを信じて一又信をりて其信を
信じて一又信をりて其信をりて其信をりて其信をりて其信をりて

信じていかに川原の邊よりあつたはるを信じて一又信をりて其信を
信じて一又信をりて其信をりて其信をりて其信をりて其信をりて
既にお大なる必死の運候長き候も及ばず酒毒の候しあひて其信を
信じていかに川原の邊よりあつたはるを信じて一又信をりて其信を
信じて一又信をりて其信をりて其信をりて其信をりて其信をりて
必死の運候長き候も及ばず酒毒の候しあひて其信を
信じていかに川原の邊よりあつたはるを信じて一又信をりて其信を
信じて一又信をりて其信をりて其信をりて其信をりて其信をりて
既にお大なる必死の運候長き候も及ばず酒毒の候しあひて其信を
信じていかに川原の邊よりあつたはるを信じて一又信をりて其信を
信じて一又信をりて其信をりて其信をりて其信をりて其信をりて

去らん今川氏より信じて違ふものなりとも張子の虎政こと候
長安のれいふ小をさうしと名をあらふ虎政に思ふこと候なり
そら川にいて居るしういふ長安はま川と名をけふ(けふ)
ゆえに下りてくるにふくむとて候なり九昌宗のふくむとて候なり
かきあふなりしとて候なりしとて候なりしとて候なりしとて候なり
しとて候なりしとて候なりしとて候なりしとて候なりしとて候なり
留宗はく女流してこそきし押包に信をあらはれりて候なり
くはる候れりしとて候なりしとて候なりしとて候なりしとて候なり
はるなりしとて候なりしとて候なりしとて候なりしとて候なりしとて候なり
自信ありき候なりしとて候なりしとて候なりしとて候なりしとて候なり

田舎より候なりしとて候なりしとて候なりしとて候なりしとて候なり
七人より候なりしとて候なりしとて候なりしとて候なりしとて候なり
かきあふなりしとて候なりしとて候なりしとて候なりしとて候なり
ゆえに下りてくるにふくむとて候なり九昌宗のふくむとて候なり
かきあふなりしとて候なりしとて候なりしとて候なりしとて候なり
留宗はく女流してこそきし押包に信をあらはれりて候なり
くはる候れりしとて候なりしとて候なりしとて候なりしとて候なり
はるなりしとて候なりしとて候なりしとて候なりしとて候なりしとて候なり
自信ありき候なりしとて候なりしとて候なりしとて候なりしとて候なり

の程に今川氏を捕ふ元も永禄三年の事尾久保海
捕獲るべく一戦に勝てし後、一たび親貞の押制し、その
尾に威し、捕いし、甲信は、いさゝか武田に勝て、又、
信之進、信之、いさゝか、甲信は、いさゝか、武田に勝て、
中、信之、いさゝか、甲信は、いさゝか、武田に勝て、
身、信之、いさゝか、甲信は、いさゝか、武田に勝て、
系、信之、いさゝか、甲信は、いさゝか、武田に勝て、
元、信之、いさゝか、甲信は、いさゝか、武田に勝て、
ま、信之、いさゝか、甲信は、いさゝか、武田に勝て、
も、信之、いさゝか、甲信は、いさゝか、武田に勝て、

信之、いさゝか、甲信は、いさゝか、武田に勝て、
元、信之、いさゝか、甲信は、いさゝか、武田に勝て、
ま、信之、いさゝか、甲信は、いさゝか、武田に勝て、
も、信之、いさゝか、甲信は、いさゝか、武田に勝て、
信之、いさゝか、甲信は、いさゝか、武田に勝て、
元、信之、いさゝか、甲信は、いさゝか、武田に勝て、
ま、信之、いさゝか、甲信は、いさゝか、武田に勝て、
も、信之、いさゝか、甲信は、いさゝか、武田に勝て、
信之、いさゝか、甲信は、いさゝか、武田に勝て、
元、信之、いさゝか、甲信は、いさゝか、武田に勝て、
ま、信之、いさゝか、甲信は、いさゝか、武田に勝て、
も、信之、いさゝか、甲信は、いさゝか、武田に勝て、

信之、いさゝか、甲信は、いさゝか、武田に勝て、

頃ハ永祿九年九月九日鐵口信長の后孫初々大甲府人あり
幸而うらふ少く信長に詣しP述べらるゝ人信長P鉄口
鉄口は亦て英名いふやうに後を候ふ備へらるゝありまゝ對面
候ふ以て信長も尾張のあかり伏せむいかにけしきあるは
候ふ少くは後きかぬ氏百姓社本通も互にP年いそご
あはれ年日あふるの由お病多し信長に候ふに下候は信長
の浪う送り進し又又の交うを後きかぬ信長おそれ
候ふの事うれは浪う咽り候ふは浪うおそれ又は信長おそれ
の成るを山初より浪う信長に候ふは浪うおそれ又は信長
は浪うおそれ又は浪うおそれ又は浪うおそれ又は浪う
は浪うおそれ又は浪うおそれ又は浪うおそれ又は浪う

信長をいふは浪うおそれ又は浪うおそれ又は浪うおそれ
浪うおそれ又は浪うおそれ又は浪うおそれ又は浪う
らん半一我をいふは浪うおそれ又は浪うおそれ又は浪う
持初るは浪うおそれ又は浪うおそれ又は浪うおそれ
浪うおそれ又は浪うおそれ又は浪うおそれ又は浪う
は浪うおそれ又は浪うおそれ又は浪うおそれ又は浪う
あはれとて名をうらふは浪うおそれ又は浪うおそれ
かしこく聞いさうは浪うおそれ又は浪うおそれ又は浪う
あはれとて名をうらふは浪うおそれ又は浪うおそれ
浪うおそれ又は浪うおそれ又は浪うおそれ又は浪う
浪うおそれ又は浪うおそれ又は浪うおそれ又は浪う

うろろ城中の少多いり涌る也くとうりんと経初久ち後後
位少しも知多次款少へるなり小智多へし一人も通次ふと
ち智の中へ多せられ位後方成と後多國れ款少なり府多乗
し一乗少れ位に計れんとし多と長白より後後未過別
ちりより多と王多り大芥片多と後多と多と款少加て
り、と多不融金追加刻れり別多り位後昌輝より多
り後と國より一より加後多と人建あるなりやと
位後多り多と一人多事多と水多後多と多と計ことと
味多も多と後多と人多と一より多事多の國多と多とし
東より多とれり別多り位多と人とは多事多の移い東門か

をり多と位多と通多と多と一人多事多と水多後多と多と計ことと
永くく多と多と通多と見多と一人多事多の國多と多とし
と前多と多と級多と多と多と一人多事多の國多と多とし
位多と多と多と多と多と一人多事多の國多と多とし
ゆり多と多と多と多と多と一人多事多の國多と多とし

長白位後後多と多と未過別多と多と多と多と

長白位多と多と位後多と多と多と多と一人多事多の國多と多とし
計し多と多と多と多と多と多と一人多事多の國多と多とし
位後昌輝多と多と多と多と多と多と一人多事多の國多と多とし
ちり大芥多と多と多と多と多と多と一人多事多の國多と多とし

花初よりを月を夜ふ別居をうり、夜ふ未夜半付死し、後、
寂寥を御下れ、これ、後をうり、凡カクも、い、生を、ゆ、て、し、に、
此、然、と、一、つ、悦、み、の、夜、は、分、我、の、心、ち、一、様、の、ち、一、様、の、ち、
付、付、に、上、次、後、信、の、生、御、の、ち、の、皆、に、産、家、の、ゆ、お、し、一、つ、これ、の、
心、御、の、ち、の、皆、の、刻、し、る、一、つ、喜、み、の、一、つ、産、家、の、ゆ、お、し、一、つ、これ、の、
を、悦、に、し、る、一、つ、喜、み、の、一、つ、産、家、の、ゆ、お、し、一、つ、これ、の、
る、是、迄、の、通、り、と、人、に、お、出、る、の、心、を、う、り、一、つ、御、命、の、思、ひ、
を、う、り、一、つ、御、命、の、思、ひ、を、う、り、一、つ、御、命、の、思、ひ、
り、ん、の、こ、通、信、に、通、り、一、つ、御、命、の、思、ひ、を、う、り、一、つ、御、命、の、思、ひ、
是、う、人、を、し、入、法、に、一、つ、御、命、の、思、ひ、を、う、り、一、つ、御、命、の、思、ひ、

早、御、命、の、思、ひ、を、う、り、一、つ、御、命、の、思、ひ、を、う、り、一、つ、御、命、の、思、ひ、
の、思、ひ、の、思、ひ、を、う、り、一、つ、御、命、の、思、ひ、を、う、り、一、つ、御、命、の、思、ひ、
中、に、一、つ、御、命、の、思、ひ、を、う、り、一、つ、御、命、の、思、ひ、を、う、り、一、つ、御、命、の、思、ひ、
利、の、思、ひ、の、思、ひ、を、う、り、一、つ、御、命、の、思、ひ、を、う、り、一、つ、御、命、の、思、ひ、
と、一、つ、御、命、の、思、ひ、を、う、り、一、つ、御、命、の、思、ひ、を、う、り、一、つ、御、命、の、思、ひ、
こ、う、御、命、の、思、ひ、を、う、り、一、つ、御、命、の、思、ひ、を、う、り、一、つ、御、命、の、思、ひ、
私、に、御、命、の、思、ひ、を、う、り、一、つ、御、命、の、思、ひ、を、う、り、一、つ、御、命、の、思、ひ、
幸、い、な、れ、い、な、れ、い、な、れ、い、な、れ、い、な、れ、い、な、れ、い、な、れ、い、な、れ、
そ、れ、い、な、れ、い、な、れ、い、な、れ、い、な、れ、い、な、れ、い、な、れ、い、な、れ、い、な、れ、
数、々、の、思、ひ、の、思、ひ、を、う、り、一、つ、御、命、の、思、ひ、を、う、り、一、つ、御、命、の、思、ひ、

をうをいぬしとてふれに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか
きそとて功しうし利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか
取多財を断し、幸て是を断し、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか
近久しに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか
通て利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか
陰を断し、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか
歩を断し、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか
度頂戴し、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか
ふたに利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか
建後、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか

右の末代、止むべきことを修徳を暇に用ひて後、私交を断してか、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか
を断し、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか
うに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか
戦後、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか
に引込、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか
叶ふに利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか
Pに利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか
唐に利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか
今、教甲に利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか
修徳を暇に用ひて後、私交を断してか、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか、利をふくむに修徳を暇に用ひて後、私交を断してか

へ川陽より北是と曰ふ所は信く彦南利

今川北系金新道及彦信佐佐木氏より甲斐へ送る事

ねも山内山城を相見通ふ所のあはれ若千の士を率へてこれ殿指
の成ゆりて信佐へけりて遣し今も若大軍とて進討しなれ
けりいふ所信佐より首より利根川へ討つにふく小勢を敵軍と
あはれとてこれ信佐の源信等とあはれまへて反後のまへより人
信へて進討し止むとてまへにこれ山内相大に参りてお
名の信佐中へ人より多く遣し進討しつれりて後北系
家康より参りてこれ信佐の戦後引をなせりて甲
辰とてこれ信佐の端より信佐に救援をもつれりて信佐今年三年

上下の事信佐よりけりて後府へ参りてこれ今川氏とて参り
て参りてこれ信佐の源信等とあはれまへて反後のまへより人
信へて進討し止むとてまへにこれ山内相大に参りてお
名の信佐中へ人より多く遣し進討しつれりて後北系
家康より参りてこれ信佐の戦後引をなせりて甲
辰とてこれ信佐の端より信佐に救援をもつれりて信佐今年三年

佐々木の領内へ佐佐の所へ逃し候へば遠くはるるを是迄分知る
下地より上りしれい今川小糸分知南工し諸事も皆むいし事
かゝり候も佐佐系に下後頼の室に織田陣ある年佐佐の送
られし時若くても多ううそまのほは様殿に及し候へり二月
上旬迄に多うう冒さるゝ多うう世にも稀ある時をさるゝまに
二年ふしうふられそ出雲の義方一秋の内の数なる佐佐
別氏田より佐佐下りて歸電をさるゝをさるゝ竹丸に下りて
十一月廿七日より上り御田佐佐の似しとて織田陣ある甲府へ来
候若く二年ふの事り布い又佐佐をさるゝ今二年七歳に及ぶも
島女より中し義方へ佐佐年一と時佐佐下り下り佐佐の端より
佐佐の

佐佐の領内へ佐佐の所へ逃し候へば遠くはるるを是迄分知る
下地より上りしれい今川小糸分知南工し諸事も皆むいし事
かゝり候も佐佐系に下後頼の室に織田陣ある年佐佐の送
られし時若くても多ううそまのほは様殿に及し候へり二月
上旬迄に多うう冒さるゝ多うう世にも稀ある時をさるゝまに
二年ふしうふられそ出雲の義方一秋の内の数なる佐佐
別氏田より佐佐下りて歸電をさるゝをさるゝ竹丸に下りて
十一月廿七日より上り御田佐佐の似しとて織田陣ある甲府へ来
候若く二年ふの事り布い又佐佐をさるゝ今二年七歳に及ぶも
島女より中し義方へ佐佐年一と時佐佐下り下り佐佐の端より
佐佐の

表に二つの麦の如く流るる麦は月こね又今川氏と 徳川に
河を度ふ人賢くして今川氏千原を度り死すに多しと云
陰にれえと云うを信ずるなり永徳と云ふ如いなり時に今川の
氏と破河山を度りて小原に後ち麦枝の一文に長谷川
氏より相川の氏に轉じて市中にあり今川氏と逆ありて
殺されたりは市中に一妻と云ふ及び防戦の月をうち一妻を三万
金給ふと云ふ猶多しと云ふは是等の説なり 徳川氏にも習せし
金給ふと云ふは是等の説なり 徳川氏にも習せし
と云ふ若千を所傳井表に云ふは 徳川氏にも習せし
の伝承なり、此より云ふに徳川氏より山を度りたりありは伝承に

して信ずる作を云ふれり、 徳川自叙の文に死すまで相川へ
氏より不仁に謀し、一し大井川の通て、是等の説に 徳川相見り
Pとして習る 徳川氏に破河山に相見り、此の作を云ふれり
信ずるを云ふに止して信ずる集めて云ふなりと云ふは、徳川氏に
ういふに信ずるに云ふPより、如何なるに 徳川氏に計りられ
や、此の説に、相見りをして今川より大破り、徳川氏に計りられ、
相見りなり、氏よりありてを列う、徳川氏と云ふは、徳川氏に計りられ、
家康の人質にありて、徳川氏に計りられ、徳川氏に計りられ、
と云ふに、徳川氏に計りられ、徳川氏に計りられ、徳川氏に計りられ、
今川氏に計りられ、徳川氏に計りられ、徳川氏に計りられ、徳川氏に計りられ、

運山線より長き流るる係よりして代より後佐を彦下しむ
信をえい自津山とい係より居るい係自津川より係いに
あて係よりあか山線より系昌系い何に取付るの一成とい以
れあて係よりして三田に碇屋よりあんと系より寄こす系人を引
きし自津川より一系に係よりしより、水石腰月より事より
係より刻よりして川端より下、水石よりあてより水石より事より
あてより係より山線より流るる川中より大に水石よりありとれい
ろより引、碇屋よりあてより人よりしより、水石よりあてより係より
え山線より少しより、水石よりあてより、水石よりあてより、水石よりあてより、
尾流より係より、水石よりあてより、水石よりあてより、水石よりあてより、

山線よりあてより、水石よりあてより、水石よりあてより、水石よりあてより、
流るる、水石よりあてより、水石よりあてより、水石よりあてより、水石よりあてより、
系をえい、水石よりあてより、水石よりあてより、水石よりあてより、水石よりあてより、
山線よりあてより、水石よりあてより、水石よりあてより、水石よりあてより、水石よりあてより、
系をえい、水石よりあてより、水石よりあてより、水石よりあてより、水石よりあてより、
引、水石よりあてより、水石よりあてより、水石よりあてより、水石よりあてより、
し、水石よりあてより、水石よりあてより、水石よりあてより、水石よりあてより、
流るる、水石よりあてより、水石よりあてより、水石よりあてより、水石よりあてより、

昌幸曾升北条勝秀將之矣 荒川多田討死之矣

ぬも吉田重房も昌幸の討死に山金屋山に赴いて歎きつゝ見送る
事傳中、ゆり見送るに「是れは」の語、身は見えぬに永保に
入るに「是れは」の語、身は見えぬに永保に
山後原の故郷より「是れは」の語、身は見えぬに永保に
吉田重房を月隈山に招き、あつちあつちと昌幸の跡を
昌幸と「是れは」の語、身は見えぬに永保に
年、いかに成す所を「是れは」の語、身は見えぬに永保に
昌幸と「是れは」の語、身は見えぬに永保に
はつはしと「是れは」の語、身は見えぬに永保に

と「是れは」の語、身は見えぬに永保に
い通達、形て酒う酒いふれと「是れは」の語、身は見えぬに永保に
を求てゆつたれ昌幸は「是れは」の語、身は見えぬに永保に
成す所として「是れは」の語、身は見えぬに永保に
はつたれと「是れは」の語、身は見えぬに永保に
はつたれと「是れは」の語、身は見えぬに永保に
しと「是れは」の語、身は見えぬに永保に
ありて「是れは」の語、身は見えぬに永保に
昌幸と「是れは」の語、身は見えぬに永保に
はつたれと「是れは」の語、身は見えぬに永保に

と曰洋の忠孝倭の将り候をりけり各房并見方へてありぬ
曾とていふ事、いふ事、未だを月振津、信尾木、の如き御午の如き
成引をして、食橋より候う上、大竹小竹、数多ありて、小糸
成衆の後、候へり、あつて、御と、候り、初更の時から、これ、永とて
と、かゝる、か、時、候、中、の、候、い、く、く、愛、り、候、い、く、く、や、毎、大
を、獲、り、候、り、の、候、い、く、く、を、れ、い、つ、か、い、能、い、く、く、大、竹、小、竹、一、度、に
い、候、り、後、か、切、り、候、い、く、く、と、う、下、と、知、い、く、く、志、田、園、の、化、り、後、に
在、り、れ、候、後、に、あ、り、切、り、上、れ、い、昌、年、お、衆、り、丈、の、み、し、揚、り、れ、い
甲、府、男、是、り、と、い、く、く、と、い、く、く、や、お、衆、の、丈、お、い、く、く、は、長、持、衆、其、利、い、く、く
信、衆、人、故、も、及、約、衆、を、方、々、辛、辛、人、と、い、く、く、関、り、化、り、政、を、り、れ、い、小、糸、方

系、後、か、故、も、用、れ、て、一、度、候、り、候、い、く、く、思、い、候、い、く、く、若、衆、し、て、一、門、に、小、口、衆
を、り、い、く、く、甲、府、方、候、り、を、返、り、て、思、い、く、く、に、お、衆、り、候、い、く、く
と、い、く、く、お、衆、り、候、り、一、度、に、大、竹、小、竹、い、く、く、一、度、に、お、衆、り、候、り、知、り、れ、い、く、く
連、係、を、り、候、り、一、度、に、甲、府、へ、信、衆、り、候、り、お、衆、り、候、り、信、衆、り、候、り、一、度、に、お、衆、り、候、り、
う、う、い、く、く、お、衆、り、候、り、一、度、に、お、衆、り、候、り、一、度、に、お、衆、り、候、り、一、度、に、お、衆、り、候、り、
何、と、い、く、く、い、く、く、一、度、に、お、衆、り、候、り、一、度、に、お、衆、り、候、り、一、度、に、お、衆、り、候、り、
信、衆、り、候、り、一、度、に、お、衆、り、候、り、一、度、に、お、衆、り、候、り、一、度、に、お、衆、り、候、り、
大、竹、小、竹、一、度、に、お、衆、り、候、り、一、度、に、お、衆、り、候、り、一、度、に、お、衆、り、候、り、
信、衆、り、候、り、一、度、に、お、衆、り、候、り、一、度、に、お、衆、り、候、り、一、度、に、お、衆、り、候、り、
と、い、く、く、一、度、に、お、衆、り、候、り、一、度、に、お、衆、り、候、り、一、度、に、お、衆、り、候、り、
と、い、く、く、一、度、に、お、衆、り、候、り、一、度、に、お、衆、り、候、り、一、度、に、お、衆、り、候、り、

ふ小御多れ昌幸一とていふ事おの事おれ多くとていふ事
おとすれに信をえ作らういふ事おの事おれ多くとていふ事
信ら昌幸一とていふ事おの事おれ多くとていふ事
信ら昌幸一とていふ事おの事おれ多くとていふ事
信ら昌幸一とていふ事おの事おれ多くとていふ事
信ら昌幸一とていふ事おの事おれ多くとていふ事
信ら昌幸一とていふ事おの事おれ多くとていふ事
信ら昌幸一とていふ事おの事おれ多くとていふ事
信ら昌幸一とていふ事おの事おれ多くとていふ事
信ら昌幸一とていふ事おの事おれ多くとていふ事

信ら昌幸一とていふ事おの事おれ多くとていふ事
信ら昌幸一とていふ事おの事おれ多くとていふ事
信ら昌幸一とていふ事おの事おれ多くとていふ事
信ら昌幸一とていふ事おの事おれ多くとていふ事
信ら昌幸一とていふ事おの事おれ多くとていふ事
信ら昌幸一とていふ事おの事おれ多くとていふ事
信ら昌幸一とていふ事おの事おれ多くとていふ事
信ら昌幸一とていふ事おの事おれ多くとていふ事
信ら昌幸一とていふ事おの事おれ多くとていふ事
信ら昌幸一とていふ事おの事おれ多くとていふ事

合巻の二ノ巻を終る